

今回は、『あいまいみい』との特別緊急コラボ企画！

Mチャンネルから誕生した Aya と Iku と Arisa の3人が恋愛トークを展開しながらチョコレートを食べまくる番組『あい まい みい』。

そんな仲良し3人組の未来予想図が短編小説になりました。

そして近未来にはもっと大掛かりなコラボが・・・

とにかく『あいまいみい』リスナーは必見なのだ。

-1-

「不可能だって私はやるっ！」

「Aya はあいかわらず大袈裟やね。」と Iku。

確かに大袈裟な話だ。思いつめたようにいうから一体なんだろうと思ったらどうやら運転免許を取るらしい。

「だって、まだお金も貯まってないし大変なんやから！」

「はいはい」とあしらう Arisa。

「もう Arisa まで馬鹿にしてえ」

「で、いつ取るん？」すかさず Iku が問いただす。

「そうやなあ。今の高3の子達が免許取り終わる頃かな？」

「一緒は、プライドが許さんてか(笑)」(Iku)

Aya たち3人は一学年上の社会人。(あっ Arisa はワケアリ高3だったかな?)

「プライドちゃうって、わざわざ人の多いときにいかんでもよいよん」

「はいはい」 (Iku)

「ちょうど雪も降らへんなるし」

「はいはい」 (Arisa)

「もう Iku ッ! Arisa ッ!! (怒)」

「もうもう言ったら牛になるで」

「っていつの時代の人～？」

少し間をおいて Iku がポツリと口にした。

「それやったら、Aya が免許取る頃には、Arisa はもう舞鶴にはおらんなあ」

Arisa は、大阪の専門学校への進学が決まっている。

こんな会話をしていたのがお正月。

Aya は、春にはメデタク免許を手にした。(o^-')V

-2-

「あいッ！」

「まいッ！」

「みい～～♪」

毎週水曜には、M チャンネルのスタジオで Aya と Iku の番組「あいまいみい」収録がある。

Mチャンネルは、全国的にも珍しいインターネットラジオ放送局。
収録した内容を、その翌日から1週間聴くことができる。

ネットができる環境があれば、いつでも、どこでも聴くことができるので、リスナーは、
自分の時間優先で聴く時間をつくることができる。

ある意味、AMやFMよりもリスナーの視点にたった放送局だ。

早速Ayaは、番組の中で報告をした。

「今日は皆さんに朗報がありま〜す。」
舌足らずですこし甘えたような口調が人気のAyaが切り出した。

「なに？なに？」
Ikuがすかさず反応した。
IkuはAyaと同じ年とは思えないような落ちついた調子に定評がある。

「なんとAyaは車の運転免許をとっちゃいました〜パチパチパチパチ」

「ふーん。おめでと」トーンを落としてボソッとIku。

「あっIku。なんか冷たい。もっと喜んでよ〜」

「でも免許とっただけやろ？」

「なにそれ。Arisaならもっと喜んでくれるのになあ。Arisaーッ聴いてるう？免許とったよー。イエーイ」
Ayaは、大阪に旅立ち、現在番組お休み中のArisaに呼びかけた。

「車買ったらもっと喜んであげるわ」

「車？」

「そう車。」

「ふふん」

「なに？その怪しげな笑みは・・・」

「実は・・・」

「実は？」

「なんと車も買っちゃいましたあ」

-3-

その収録の後。

Aya が、いつものように「メンバーのボヤキ」にブログを書いていると番組プロデューサー EGISON#9 が、話しかけてきた。

「Aya、おまえなあ。いきなり車買ってやっていけるんか？」

「なるようになるでしょ。」

「？・・・。あんなあ。おまえに目標がないんなら俺は何も言わん。けど・・・。まあええわ。その程度なんなら・・・」

Aya には、声優になるという志がある。そのことで EGISON#9 にも何度も相談に乗ってもらったし、番組でも公表している。

EGISON#9 は、それを気にかけているのだ。

心配してくれるのは有難いことだし、自分でも不安は充分感じている。

「だって今までの人生なるようになってきたし。どうにもならんって事は有り得んし。結局どうにかなるもん。」

「俺は、別におまえがどうなってもかまへんけどな。」

ああ。いつもこうだ。なんでこうなるんやろ？

EGISON#9 さんは、すごい私のこと心配してくれてるし、素直になれればいいのに。

気まずいムードを払拭しようと、Aya は Iku に言う。

「Iku ちゃん！今度ドライブしよっ！」

「・・・」 (-_-)zz

「寝てるし・・・。もお」

-4-

「複雑な気分やわぁ」

Mチャンネルの収録後、ウトウト眠っているところを Aya に揺すられて、交わしたれいの約束の当日。

Iku は、待ち合わせ場所の八島商店街の七条角にあるMチャンネルサテライトスタジオにやってきた。

店には、コーヒーインストラクターの高橋、神具「はち鶴」の店主オカヤンが遊びに来ていた。

「よう Iku、今日がお前が見納めかもしれんおう」

「笑えん冗談言わんといてください！」

なんだかそわそわ落ち着かない。

何しろ今から、免許とりたての Aya が運転する車の助手席に座らないといけないのだ。

「バンジーより怖いっちゅうねん！」

しかも、秘密だとか言って、Aya は、行き先も告げてくれてはいない。

快晴の空、爽やかな春風。

うらかな気候とは裏腹に、Iku の気分は暗雲立ち込めていた。

と、そのとき誰かが叫んだ。

「なんやあれは？」

振り向くとガラス越しに不穏な動きをした車がみえた。

「ありえない！」

Iku は、目を覆った。

時速 10 キロ前後でロデオのように妙な上下運動を繰り返している車が走っている。

さっきまで、パソコンに向かって只管作業していた EGISON#9 が、慌てて車のほうに走っていき叫んだ。

「Aya っ！サイドブレーキ引いたままやろっ！」

若葉マークの新車が止まり、窓が開く。

「なんか進まんおもた。」

意外にも平然としている Aya。(反省しろ！)そして Iku に気づいた。おいおい、ピースまでしているよ。

「IKu-っ！みてみてかわいいやろ？イケ！イケ！オンナノコ」

ピンクのダイハツミラ・・・

「あかん。乙葉になりきっとるし・・・」

<http://www.daihatsu.co.jp/showroom/cm/mira/index.htm>

「ミラ♪ミラミラミラーラ♪」

「大人気ない・・・・。あのトンチンカンは大人気ない！」

- 5 -

セルをひねり、若葉マークをつけたピンクのミラは、IKu を乗せて発進。

発進？発進？？あれ？発進しない！

「Aya？ドライブがニュートラルのままっ！」

「ゴメンゴメン」

「ちゃんと確認しなきゃ」

熊田曜子もびっくりだ。

P に切り替え、再び発進。

指示器のかわりに、ウォッシャー液が飛び出す。

井上和香も仰天だ！

「だいじょぶなん？」

「なるようになるでしょ。」

「・・・・・・・・」

エンジン音も快調に、車はようやく M チャンネルを後にした。

途中、てんぷら屋「焼香」の主人イナちゃんにであった。

イナちゃんは、M channel from 舞鶴の初代 DJ の一人であり、現在も「あいまいみい」でもエンジニアをしてくれている。

二人が手を振ると、何故か、いなちゃんは目を閉じ手を合わせて見送った。

— 6 —

「Aya。どこいくん？ほんま」

サングラスをかけて格好だけは一人前の Aya は、何故か、はぐらかす。

「ん？うちらならではのどこ！」

「うちらならでは？」

「うん」

「わかった。京丹後のマイン！」

「なんで？」

「うちの番組『あいまいみい』やん？そやから『あいまいみいまいん』」

「はい。違いまーす」

二人を乗せた車は、国道 27 号線を東から西へと進み、京都銀行がある大手町の交差点のところまできていた。

そして Aya はハンドルを左にきった。

西の町並みをすぎ、舞鶴若狭道の舞鶴西インターの付近までやってくると、対向車の数台がパッシングをしてくる。

「なんなん？」

「Aya？なんか変な運転しとんちゃう？」

いままでの失敗には、あっけらかんとしていた Aya も流石に動揺する。

「え？わからん」

そうこうするうち原因が判明した。

真倉の HOTEL HULA MOON の向かい側で、警察がスピード違反の取締りをしていたのだ。

「ああ、みんなこれ教えてくれてたんか。人ってやさしいね」

「あれ？あれってもしかして・・・」

Aya の言葉を遮って Iku が助手席の窓の向こうを指差していった。

その「もしかして」だった。

てなわけで、オンガクノタネのバズアイさんが、車をとめておまわりさんとお話をしていた・・・

いつもチケットのもぎりをしている立場の人が、キップをきられているのはなんとなく不思議なシチュエーションだった。

バズアイさんを尻目に、車はさらに綾部の方角を直進する。はいはいはい。

参照：オンガクノタネ

<http://mch.maizuru.info/mchannel/modules/popnupblog/index.php?param=5>

— 7 —

Aya と Iku を乗せたピンクのミラは、国道 27 号線を右折した。

新綾部大橋を渡り国道 173 号線に入った。

そして一つ目のトンネルまでやってきたところで、

「キャーーーーーッ」

Aya が、とあるホテルで、白粉を塗った支配人にびっくりしたフジテレビのアナウンサーのように驚愕の叫び声をあげた。

「どっ、どうしたん？」

車が蛇行し、Iku がのけぞるように座席にへばりついた。からだは自然に硬直する。

「みえん！？真っ暗やー！？ライトも点けたのにい！？」

Iku が、Aya の顔をみるや否やさげんだ。

「Aya！サングラス！サングラスはずしっ」

サングラスを外し、Aya に笑顔が戻った。

カチュウシャのようにかけなおしたメガネをさわりながら、

「なーんや。これか」と Aya。

「なーんややないで。死ぬかおもたわ。」

「まあまあ、そおこらんと」

「おこらいでかつ！！！」

トンネルを抜けると、しばらく山道が続いた。窓越しに映る山並には白いものが点在して見える。

ヤマザクラだ。

ソメイヨシノよりも遅咲きの山桜が、日に日に深まる雑木林の緑のなかで一際存在を誇示しているかのように開花しているのだ。

このあたりに来ると対向車は少なくなってくるが、また対向車が Aya 達の車に、パッシングしてくる。

「あれ、またスピード違反の取締しとんかなあ？」

「わからん」

Aya は、速度をゆるめた。法定速度きっちりに走る。

「なんか、いらつくなあ。このスピード・・・」

Iku が不平をもらす。

しばらく走ったが、取締っている様子はない。それどころか、まだまだ対向車がパッシングしてくる。

「もうちょっと先でしとんかな？」

相変わらずマイペースな Aya。だが、対向車の親切はスピード違反取締の告知ではなかった。

ふたりは、トンネル以降ヘッドライトを点けっぱなしのままだということに気づくこともなくドライブを続けた。

とろとろとろとろ・・・。

-8-

二人は国道 173 号線をそのまま真っ直ぐに進み能勢まできて給油をした。

「いらっしやませっ！」

スタンド店員さんの威勢のよい声が響く。

「レギュラー、満タン、現金で！」

ご満悦そうな顔を見せる Aya。

「このフレーズいっぺんいうてみたかったんや」

「お客さーん。給油口開けてもらっていいですか？」

「ん？きゅうゆぐち？」

しばし呆然の Aya。

店員さんがかけより、さわやかに指示してくれる。

「すみません。そのサイドブレーキの下にあるレバーを上にもらえますか？」

Aya が右往左往している間に、店員はライトに気づき消灯。さりげない気配りをみせる。

「ああ。これのことか」

ようやく給油口が開いた。

『『これのことか』やないで。自分の車ちゃうん？』

突っ込みを入れる Iku。やや切れ気味だ。

「まあまあ。そう怒らない怒らない。不自由を常と思えば不足なし」

「何それ？」

「うちのおじいちゃんの口癖。徳川家康の遺した言葉なんだって」

「家康？そんな気い長ないっちゅうねん」

「有難うございましたっ。」

深々と頭を下げ跪くスタンドの店員さん。気持ちのよい挨拶に見送られて二人はドライブを続けた。

「Aya。ちょっと疲れたで、シート倒してもいいか？」

そういって、Iku はゆっくりとシートを後ろに倒し、少しノビをした。

新車を下から見渡す。すると妙なものが置いてあるのに気づいた。

「なあなあ Aya。これ何？」

「ああそれ？紅葉マーク」

「紅葉マーク？」

「うん。おじいちゃんが運転するとき用。初心者がつける若葉マークの逆バージョンで、年にとって運転に自信がなくなってきたらつけるんやって」

「ダサ」

「ダサゆわんといてよ。うちのじいちゃん、めっちゃやさしいんやから。この車もおじいちゃんが買ってくれたんやで」

「うそ？」

「ほんまや。そうそうこの間私Mチャンで EGISON#9 さんに怒られたやん？あのあと色々考えて、このままではあかんわっておもたんや。夢があるのに、欲しいものを計画も立てずに買ってたら夢なんて叶うわけないわって……。でももう車は浜の川井オートさんに注文してしもとったし、どうしようって思ってたんやんかあ？そしたら困ってる様子を見てたおじいちゃんが『ワシと一緒に乗ろか？』って」

「まじで？車も車の色もそのまま？」

「うん」

「めっちゃいいやん」

「そやろ？私っていろんな人に守られてるなあって」

「ほんまや」

「まっ、それもこれも私がかawaiiからやけどな」

「それいうたら、え一話が台無しやろ？」

「やっぱり？私な、Arisa にいわれたんや」

「？」

『私らは口先だけの大人にはならんところな』って。」

「さすがアメリカ帰り。いうことがちゃうなあ。それに Arisa ってなにげに有言実行型やもんなあ」

「うん。それが Arisa が舞鶴出発する日、私に贈ってくれた言葉なんや。」

「ふうん」

「私も、そのときに Arisa の気持ちにしっかり応えよ思ってな。いらんことゆーてもたんや」

「な、なんてゆーたん？」

「免許取ったら Iku 連れて Arisa の下宿まで車で遊びに行くわって」

「ええ？じゃあ、もしかして今日のドライブの目的地って？」

「そう、そのもしか！あたしは口先だけの大人にはなりません！」

イケ！イケダ！オンナノコ。二人を乗せたピンクのミラはまもなく阪神高速池田線の I C にさしかかろうとしていた。

「Aya？まさか、高速に乗る気？」

「はい。そのまさか！」

「いきなりは無理やって！」

「不可能だって私はやるっ！はいつこれ Arisa の家の地図。しっかり navi 頼んだよ。Arisa-ッ！今から行くから待っててねっ」

「まだ死にたくねえ～」

メモリーツリーだけが描かれたまだ真っ白なノート。

そこにようやくと、緑と黄の新芽がかきこまれた。

Aya と Iku。

ふたりは車のワイパーのように、フロントガラスの雨粒を取り除きながらも、いつでも一緒に円を描こうとしていた。

これからも。きつとともに紅葉をつけるまで。

(おわり)

あいまいみいのブログ

<http://blog.livedoor.jp/aimaimi3/>

※この物語は、M チャンネルの番組「あいまいみい」を題材にしたフィクションです。登場人物の発言や出来事は事実に基づくものではありません。特に Iku さんの口調は、作者の

想像によるもので本当はもっと荒っぽいそう。